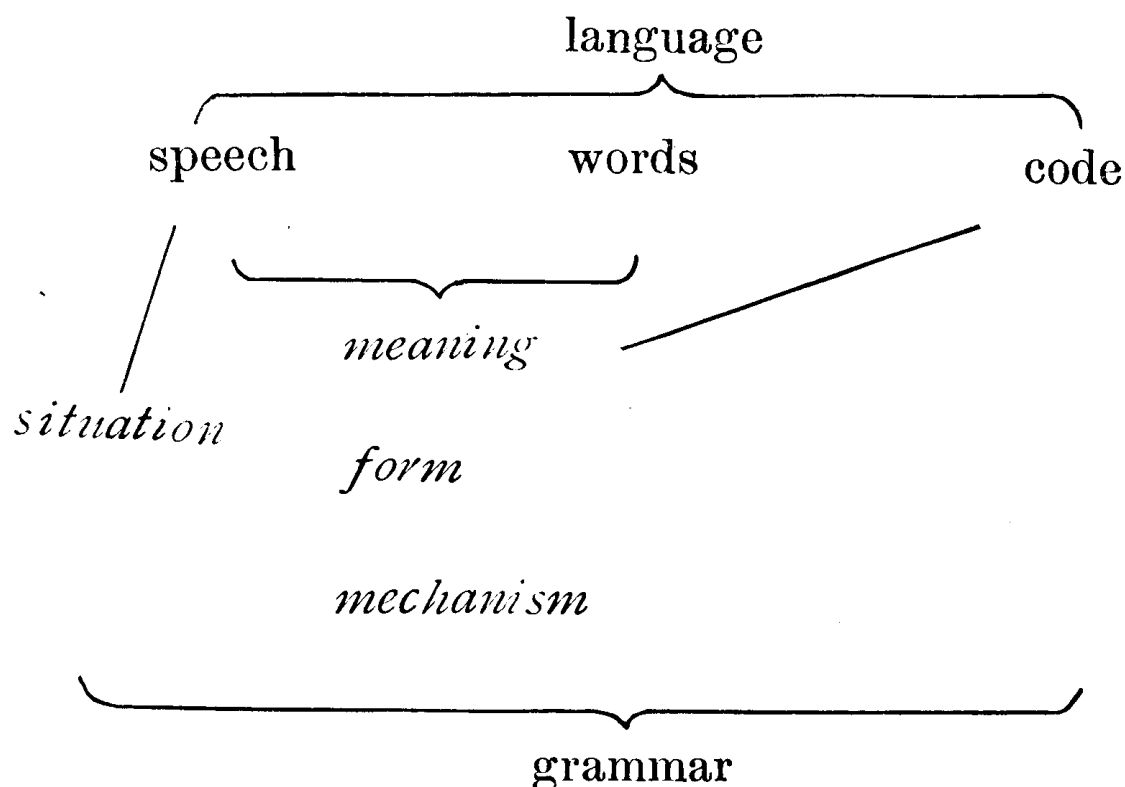


の理論は重厚である。だが英語の語法研究という点からは、その utility に疑問がある。ただその根本的な、ものの考えかたには大いに取るべきものがある。彼の theory of speech and language を既述のように組み直して見れば grammar の研究に十分活用することの出来るものであり、また活用すべきものである。

(昭和31年9月23日稿)

唯一の事柄であつて、adjective use かどうかを考える必要がないのと同断である。

Gardiner の language は狭義の language である。狭義の language に speech を対立させて、それに word 対 sentence を呼応させ、それによつて grammar の限界を定めようとするのである。しかしこのような language の規定が語法研究に大して役に立たないものである事は既述の通りである。speech は language に対立せしめるものではなく、language に包含せしめるべきものであつて、広い意味の language 即ち speech をも含めた language の研究が grammar となるのである。grammar には又 code の考えかたも加えなければならない。これらを同じ足場に置いて観察考察することが必要である。そこで次のような図表が出来上る。



language には speech, words, code がある。先ず speech がある。speech には words がある。何れも meaning, form があり、mechanism がある。meaning が抽出されると code となる。これら全体が language であつて、その研究が grammar となる。parts of speech の考察はこの全域にわたつて行われるのである。

6.

Saussure の langue 対 parole 観は実に独創的である。それを展開したと言う Gardiner の language 対 speech 観は非常に精細緻密である。しかしこの二つの理論は決して一致するものではない。Saussure の理論は高遠である。Gardiner

品詞の code のように interjection から取り出される意味というものは exclamation mark の意味だと言つてもいい位であつて、Ah! の意味と Oh! の意味に別段の差があるわけではなく、ただ [ɑ:] と [ou] の sound の差があるだけである。意味として抽出すべきものが固定しないから、code を設定する必要はないと言える。

Noun, adjective 等は parts of speech ではなくて parts of language と言うべきだと Gardiner は言う(p. 106)。即ち parts of speech は language に属すると言うのである。そうして noun は thing として present されたもの、adjective は attribute として present されたもの、という風に品詞を定義する。これは彼の所謂 word-form の中の inner word-form (即ち semantic aspect) から見ての区別であつて、品詞を outer word-form (即ち external aspect) のみによつて決定しようとする従来のやりかたに反対したものである。なるほど外形だけを見たのでは動詞の pen と名詞の pen は区別がないし、kingly と kindly の品詞の区別もつかないと言えるかも知れないから、品詞の区別に意味の面を取り入れよとの意見は聞くべきものがある。しかし thing, action, attribute を noun, verb, adjective の区別の基準に用いるのは賛成しがたい。move と movement は等しく action を意味しているのに、品詞は異なる。honest と honesty は等しく attribute を意味するのに、品詞は異なっている。move, movement に共通する action だけでは品詞の区別は出来ないから、action というような事とは違つた semantic aspect で区別しなければならない。

ここに move という word がある。I move という speech では move が verb である事が決定される。品詞の決定は speech に始まると言うべきである。次に move は moved, moving, to move 等の語形変化があるから、それで move の品詞を決定することが出来る。ところが move は「動く」の意味だから verb だとするのは code から見た品詞決定である。これが move の「動詞性」を最も端的に純一に表明すると言えるであろう。純粹に verb という品詞を考える時には、その code を考えることになる。¹

Gardiner は the boy king の boy の品詞について再三論じている。boy は noun であるが adjective として function しているのだと彼は説明する。これは the boy king という speech の中で boy がどのような品詞であるかを考えたり、word としての boy の品詞を考えたりする前に boy の code としての意味が卓越しているから、初めから noun であることが決定しているのであつて問題はないのである。そして一旦 boy が noun であると決定した以上は the boy king の boy が adjective として用いられるとか、機能するとかという事は品詞論としては問題外である。his hat の his が pronoun である事が品詞論として考察する

¹品詞の觀念を超越したものも考えられ得る。

にこれを code と名づけて区別したいと思う。¹ code には speech のように situation がない。speech から situation を除けば words¹ が残るが、words には意味と形態があり、その usage には mechanism があるが、words から抽出された code には意味だけが残る。

今 book という code を設定したのであるが、book は verb もあつて、

to	book	ed
	book	
	book	

の code の book は noun の book とは違う。同じ book でも noun ならば noun としての意味があり、verb ならば verb としての意味があるから、code にもその差が存在しなければならない筈である。これを無視するようでは文法的な処理は不可能になる。

英語の dog, run は noun, verb としての number, case, tense, mood, voice, person 等の文法範疇から絶縁された「犬」というもの、「走る」ということ、と考えられる時、これを code と呼ぶのである。²

Full-word の code は容易に考えられるが、form-word の code は考えかたが困難である。冠詞の a, an, the は noun を speech 化するのに用いられるものであつて、それ自体が speech としてのみ用いられるものであるが、[ə, ən, ðə, ði] でなくて [ei, ði:] が code 的に考えられる。[ei, ði:] の意味は捉えにくいけれども、たしかにあることはあるのである。pronoun は noun を承けて noun の situation に属するものであるから、speech としてのみ用いられるものである。pronoun は noun なしでは意味が捉えにくいけれども、やはり意味はある。he[hi:] は he, his, him の code と見ることが出来る。preposition と conjunction はそれだけ単独に用いられることは先ずない。speech の中で noun や sentence に附属して用いられるものだから speech であると言うべきである。しかし at school, as it is の at や as は単独に取り出して [æt, æz] と code にすることが出来る。preposition の in と adverb の in とは code として取り出せば「中」³ という共通の意味を有しているようであるが、やはり preposition の in には preposition としての意味があり、adverb の in には adverb としての意味があると言わなければならない。「の中」と「中に」の違いに似たものがあると言えよう。Ah! / Oh! のような interjection は常に speech として用いられるのは勿論であるが、他の

¹speech から切り離された words にはまだ number, case 等の category が認められるが、code には認められない。

²日本語の「犬」「走る」は絶縁すべき文法範疇を持たないものであつて、初めから code である。

³これは code を超えた問題であつて、grammar の領域外である。

Gardiner は grammar を language だけに局限したけれども、language に situation を与えれば speech になるのだし、speech もこれを捉えてその mechanism を観察することによつて grammar の対象たり得るのであるから、language と grammar を Gardiner のように結びつける謂われはないのであつて、彼の言う language はこれに speech を包含させて、もつと大きな language とし、彼の言う grammar もこの広義の language (speech + language) をその研究の対象とする、と考えた方が適切だと思う。‘Language’ is the task of lexicographer and grammarian, while ‘speech’, i. e. ‘text’, calls for the investigations of editor and commentator. (p. 330) と言うのは Gardiner 自身も断つていのように決してこのように明確に分担の所属が分れるものではない。grammar は language も speech も 併せた広い意味の language を研究すべきものである。広い language と言えは次のような考えかたも出て来るであろう。This is a book. という speech がある。これは四つの words より成る。This is a book. と言う代りに、これと同じ situation において、A book. と言うことも出来る。これも speech である。これは二つの words より成る。A book. と言う代りに、これと同じ situation において、Book. と言うことは先ずない。¹ Book. では situation が失われることになる。即ち speech でなくなつて、単なる word である。word としての book は、books ではない book なのだから、単数である。a book のように a がなくても、book だけで単数たることが初めから決定しているのである。故に word の book には number の category を認めることが出来る。²

さて book が speech として用いられる最も短い表現をいくつか取り上げて見ると、a book / the book / this book / books / the books / these books 等が考えられる。これを次のような図表にして見よう。

a	book
the	book
this	book
	book s
the	book s
these	book s

大きな枠で囲んだ部分は「本」の words であるが、小さな枠で囲んだ部分は六つの words に共通した部分であつて、これは単数と複数の観念をなくしたものである。「本」という意味だけを有して、number や case を超越したものである。words がこのように speech から切り離されて単独純一な姿で捉えられる時

¹“I can’t find my book.” “Book?” のような場合は別の situation である。

² case の category も認められる。

「botanist の研究のしかたと grammarian のそれとは同じであるべきだ。botanist は個々の植物の specimen をそのすべての environment において詳しく研究する。word は何度でも繰り返して使えるように出来ているものであるから、word (と syntactic forms and rules) は植物の個々の specimen にでなく、その species に匹敵するものである。botanist が species を研究しないで specimen を研究するように、grammarian も word を研究しないで、speech の個々の sample をその自然の surroundings において観察研究しなければならない。」¹ (p. 6)

しかしこの比喩は誤っていると思う。botanist の研究の対象は現実の植物の specimen でなくてはならない。species は捉えることは出来ないが、specimen は捉えられるからである。ところが言葉の世界で現実の specimen たる parole は捉えることが極めて困難であつて研究の対象にはならないが、speech は捉えることが出来るから当然研究の対象になるのであるが、捉えることが出来る点では language も speech と異なるところはないのである。speech の研究も language の研究も同じく grammarian の仕事たるべきである。「speech を研究する時の grammarian は実は commentator の役割をつとめているに過ぎない」(p. 6) と Gardiner が言つたのは、後に 'Retrospect 1951' で含みのある弁明を施しはしたものの、意味不通の言である。grammarian の仕事を language だけに局限して、text の研究から grammar を排除するという事が果たして general linguistic theory に適つたものであろうか。grammar は speech を研究しなければならないし、language も研究しなければならないのである。両方の分野にまたがらなければ grammar の研究は成立しないのである。

5.

Gardiner が speech は situation と結びつくものであると言うのは卓見である。しかし彼の language の不明確な事については既に述べた通りである。

P.O.D. の language の項の初めに 'Words & their use, speech' とあるのは示唆に富む説明である。language を用いて speech とする。speech とするには language を用いる。即ち words とその use によつて speech となるのである。words には意味があり、形態があつて、その usage には一定の mechanism がある。Gardiner は language は science であると言うけれども、words とその meaning, form, mechanism が science であるのではなくて、そこに見いだされる rule の体系が science なのである。それが grammar である。従つて grammar は language の中にあるのではなくて、language の外にあるのである。

¹ word は language に属していて、language は lexicographer と grammarian の仕事だと言う以上は、speech は grammar の領域外となる筈だから、上述の所論は撞着している。

る。それでは speech の区分はどうすればいいか。Look at the rain! と Look! と Rain! とはどう区別するのか。それは書いた時に capital letter で始め、終りに stop を附ける事と、発言した時に intonation による段落がつく事とで分けられるのである。そのようにして分けられた部分の中に、形の上で sentence であるものと、ないものを見分けることが語法研究上必要なのである。表現のしかたの上でも、理解のしかたの上でも。

Saussure の parole 対 langue 観は general linguistic theory としては実に鋭敏な理論である。しかし Gardiner の speech 対 language 観は Saussure の展開と言うよりも Saussure から逸脱して、原理的なものから実践的なものへの橋渡しに懸命になつたあまり、Saussure 的なものを見失つてしまつた観がある。精緻に過ぎて、結局無用の理論化に墮した憾みがある。language 対 speech はともかく、それを word 対 sentence と比例させたところに体系の崩壊が始まつたのである。

4.

小説で人物を詳しく描写して彷彿たらしめると言うけれども、たとえ自分の知っている人の顔でも、どんなに口や筆で詳しく描写しても実物そのままを描き出すことは不可能である。言葉の限界がそこにあるわけである。Gardiner は 'your old brown hat' と言えば聞き手に hat を identify させるのに役立つと言うが、その hat を前もつて見て知っているのでない限り、いくら詳しく描写しても実物を identify することは不可能である。old や brown が附いたために描写が詳しくなつて、より definite になつた事はたしかであり、your が附いたために更に特殊化された事はたしかである。しかし実物に如何に近づいても実物そのものを identify することは出来ない。ただこういう事は言える。your という determinative の存在によつて situation の枠がきめられて、'linguistic identification' が行われたと。speech の施し得る identification は精々のところこれ以上のものではあり得ない。実物そのものの identification と linguistic identification とは別物である。Gardiner も 'every word without exception is a class-name' (p. 38) と言つてするように、言葉は identical なものではなしに similar なものを表現する力しかないのである。situation はこれを助長するだけのものであつて、similar なものを identical なものにする機能を有しているものではない。speech は「唯一つのもの」であると言つたのは言葉としての事であつて、'your old brown hat' という speech そのものが「唯一つのもの」なのであつて、それでもつて hat の指す実物の identity を示すものではない。所詮は言葉は言葉であつて実物にはなれないのである。

Gardiner は従来の grammarian の研究態度を否定して、自分の研究態度はこんなものだと言ふような比喩をもつて説明している。

て、上に挙げた例を分類してみると次のようになる。

- | | |
|---|--------------------------|
| (1) Look at the rain! | } sentence }
} speech |
| (2) Look! | |
| (3) Rain! | |
| (4) The sky, the flowers, the songs of birds! | |

(1)から(4)まで全部を sentence だと言うと、(1)(2)と(3)(4)との区別を grammar で取扱えなくて不便である。(1)(2)は sentence であると言うと、(3)(4)は何と言うかという問題が残されるが、これを word(s) と言うのはいけない。word(s) と言えば(3)(4)に限らず(1)(2)もそうだから、(1)―(4)の区別には word(s) を持ちだすことが出来ないからである。しかし(1)―(4)が speech であるという事は、そう言う必要もない事ではあるが、忘れてはならない事ではある。(1)―(4)は speech であるが、(1)(2)は sentence である、(3)(4)は sentence ではない、¹ と認識することが grammar として必要な事である。(1)―(4) が等しく sentence であるとか speech であるとか言っただけでは、意味論的でなしに文法的には分化し得るものを未分化のままに一括した事になつて、実際の処理に不都合である。(1)(2)は word(s) が sentence の形態を取っているが、(3)(4)は word(s) が sentence の形態を取っていない。しかし(1)―(4)は何れも speech としての目的は十分に果たしている、それはそれぞれ situation を有しているからである。このように考える事が grammar 的な考えかたではないかと思う。sentence か sentence でないか (phrase か phrase でないかをも含めて) は文法形態の問題であるが、speech であるかないかはもつと広い問題である。人間の話すものはすべて speech であるから、sentence は speech であると言つたとしても 何等語法現象の解明に役立つことにはならないのである。

上に示した四つの speech は全部 exclamation を示す exclamatory sentence ではないかと言う人があるかも知れない。たしかに四つとも exclamation である。しかし sentence の形態を有するものは(1)と(2)だけである。declarative sentence, interrogative sentence, imperative sentence, exclamatory sentence 等は finite verb を中心とした有機的な speech の機構のものを言い、statement, question, command, exclamation 等は sentence の形態をも含めた広い speech を言うのだ、という事にすればいいであろう。² 形態的な sentence を設けたために広い意味の sentence がなくなつて困るという事はない。speech と言えいいのである。

¹Aiken の名づけた non-sentence がこれに当る。しかし non-sentence は sentence と共に speech である事を忘れてはならない。speech の mechanism を具えていないものを non-speech と名づければ、non-sentence は決して non-speech ではない。‘the songs of birds’ は non-sentence で speech だが、‘the songs of’ は non-speech である。

²例えば Rain? は question だが、interrogative sentence ではない。Is it raining? は question であると共に interrogative sentence である。

題はかなり簡単になる。

Gardiner の説くような広い意味の sentence を設定するとすれば、Look at the rain! も Rain! も Look! も全部 sentence と言うことになる。Galsworthy の The sky, the flowers, the songs of birds! も sentence である。それはそれで結構である。しかし sentence を grammar の問題にだけ限定するとして、その存在価値を考える時、今挙げたものを皆 sentence とすることに何かの効用があるのであろうか。¹ 例えば「あの花は美しい」の英訳として That flower beautiful. / That beautiful flower. / Flower beautiful that. が与えられて、そのどれを採るかと言われて、どれも採らないと答えたとしたら、それは如何なる grammar の基準によつた判断であらうか。またこれを speech の問題とすれば、これらはどんな基準に照らして speech となり得ないと決められるのであろうか。従来の sentence の基準がなくては処理に困るのではないか。(1) Look at the rain! / (2) Look! / (3) Rain! / (4) Look the rain at! / (5) At the rain! / (6) The rain at! 等の中でどれとどれが speech として用いられるのか、なぜ用いられるのか、を判断する方法がなくては speech は役に立たない。² 無数の speech の中に秩序を見出さなくてはならない。sentence もその秩序の一つとして設けられたものだと思ふことはいけない事であらうか。(1)(2)(3)は speech として成立し得る、(1)(2)は sentence として成立し得る、sentence には finite verb があるのだ、というような事が考えられなければ正当な speech の処理が行われなくなるのではないか。これは logic に関係のない事であり、心理学的にも意味論的にも無縁の事柄であるが、English grammar の sentence の定義としては実に有用なものであると言わなければならない。sentence とは subject + predicate であるが、究極的には finite verb を有する speech である。³ finite とは subject の number と person の限定を受ける動詞の活用形であつて、現在形と過去形の二形がある。finite verb はその subject との間に number と person の agreement 関係が存在するから、一種の有機的な構造だと言えるであらう。finite のある所には従つて subject の存在が当然考えられるが、Look! のように you を主語とする finite は you が現れない事が多い。sentence をこのように定義することにし

¹ 効用の有無が定義の正否に影響するわけではないが、無用の定義が無意味に等しい事はたしかである。

² speech (を構成する words) の mechanism (又は usage) に phrase, sentence 等の様式が認められる。‘at the rain’は phrase の mechanism に適っているが、‘the rain at’は適っていない。‘look at the rain’は sentence の mechanism に適っているが、‘look the rain at’は適っていない。phrase, sentence は mechanism である。

³ clause にも finite があるのに、なぜ sentence と言わないのか、と反駁するのは当を得ていない。clause は sentence である。sentence が noun, adjective, adverb の equivalent となつて clause と呼ばれるのである。

rain が Rain! となるのは word に situation が設定されて speech となつたのである。Rain! が rain と同様に word であると言つても何等矛盾するものではない。従つて人間の話したり書いたりするものはすべて word より成つていて言つても矛盾しないのである。word は language の単位であると同時に speech の単位でもあると言うべきである。

Rain! の如きものを sentence であるとする考えかたが科学的な文法観として新しい勢力を得て来て、Look at the rain! は sentence であるが Rain! は sentence ではないという従来の考えかたは妄説だとして顧みられなくなつた観がある。Sweet : *A New English Grammar*, §49 に 'Sentences are made up of words, but we speak in sentences, not words, although it may happen that a sentence is made up of a single word.' とあるが、'we speak in sentences, not words' を Gardiner 方式に直せば speech は sentence であつて word ではないということになる。しかし 'sentences are made up of words' と前置きしているのであるから、Sweet が Gardiner のような考えかたを持つていたとは言えない。

Ashurst did not answer ; he had plucked a blue floweret, and was twiddling it against the sky. A cuckoo began calling from a thorn-tree. The sky, the flowers, the songs of birds! (Galsworthy : *The Apple Tree*)
こゝに引用した文章の最後の部分は sentence であるか、words であるか。新しい見かたでは sentence である。従来の見かたでは sentence ではない。sentence は subject と predicate より成るものであるという事が logic でも grammar でも言われるために、文法的な処理をするのに論理的なものが混入したり、更に心理学的な、意味論的な、ものの見かたが錯雑して sentence なるものの定義が分れたり、その実態が掴めなくなつたりするのである。Gardiner の sentence 論も、彼が general linguistic theory を樹立しようとの目的で考察している事を念頭に置く必要があるのであつて、英語だけについて sentence を論じているのではない事を記憶すべきである。英語の I see は sentence であるが、ラテン語の Video は sentence でないと言へば、それは sentence = subject + predicate から立論したことになるが、I see = Video だから何れも sentence と言うべきではないか、という立場からは、'subject + predicate = sentence' 観を捨てなければならぬであろう。日本語の sentence を論じる場合にも subject + predicate 的な立論は役に立たないであろう。第一、英語における subject や predicate のような考えかたが日本語には存在しない上に、英語で、例えば I am tired. / Are you tired? と言うのを、日本語では「疲れた」/「疲れたか」と言うのが普通だから、英語の sentence の考えかたを日本語に取り入れること自体が無理なのである。general linguistic theory としての sentence の定義がどんなものになるかは当面の問題ではなく、英語の sentence の定義を求めようとするのであれば問

し彼の言う sentence-form なるものは language としての領域たる form の一種であるから、それをもつて speech の sentence の説明に流用するのは矛盾している。しかも locutional sentence-form の subject, predicate は従来の文典の定義に従い、彼の theory of speech and language における speech の構成部分としての subject, predicate と区別しようとし、更にこの他に logical なものと grammatical なものとの細分しようと言うのであるから、微に入り細を穿つ科学的な言語体系を樹立したかに見える Gardiner の theory も結果的には無用に等しく、事態を混乱させるばかりである。彼は language と speech とを峻別しようとの意図の下に一つの theory を提唱したのであるが、峻別するあまりに混乱を来して、細分するあまりに自縄自縛に陥つていると見られる節が到るところに観察されるのである。

そもそも unit とは如何なるものであろうか。language の unit は word で、speech の unit は sentence であると言うが、‘the majority of the sentences spoken by mankind can be broken up at will into the smaller linguistic units called words’ (p. 119) とも言っているように Gardiner の unit にも動揺がある。word を language に属せしめ、sentence を speech に属せしめるために word と sentence との関係を引き離そうとすることは色々の点で支障を来し不都合な結果をもたらすことになるのは明らかである。Look at the rain! と Look! と Rain! がすべて sentence であると説くのはいいとして、これを word から見ればどうなるのかを問題に取り上げることを行ななければ語法現象の解明は不完全と言わざるを得ない。speech としての sentence を観察すれば必ず word という unit につき当り、word を観察するためには speech としての sentence が重要な対象となる。そこで word と sentence とを同じ footing に置いて見る事が先決問題となる。word は language、sentence は speech の領域だとしたのではだめである。

人間は話したり書いたりする。話されたり書かれたりしたものはすべて speech でないものはない。英語の speech には (the) English (language) が使われる。Look at the rain! は English を使った speech であるから、English であり、speech である。また language であり、speech である。speech は個々のものとしての名称であり、language は一般のものとしての名称である。speech には situation が伴うが language には situation がない。speech から situation を切り離せば language となり、language に situation を設定すれば speech となる。結局 speech と language とは situation の枠を外せば同じ足場にあるものと見るべきものである。language の単位は word であると言うならば speech の単位も word であると言つて差支えはないであろう。language と speech との差を生じるものが situation であるとする、language としての word に situation を与えることが出来たら、その word は speech となるのではないか。

であると言う。James Hawkins が 'Rain!' と 言つたら、これは sentence であるが、これには language の rain が用いられたのであつて、rain は word である。'Rain!' の代りに 'Look at the rain!' と 言つたら、これも sentence であるが、これには language としての四つの words が用いられている。次に挙げるものはすべて sentence であると言う。 *Heavens! / Murder! / Ivanhoe / The King's Arms / Why so sad? / Have you, indeed? / If you really insist! / Hats off! / Headache? / Hungry? / Careful! / One more penny, please! / To let!*

ところで word とか sentence とかは何であろうか。word が集まつて phrase や sentence を作ると言うが、逆に sentence や phrase を解体すれば word になると考えることも出来る。日本語では書き流しだから word がどこで切れるのかを形の上で簡単に見分けることがむづかしいが、英語の場合は例えば This is a book. のように分ち書きにするから問題はないと言える。しかしそれは書いた場合のことであつて、話す場合にはやはり word と word の切れ目は簡単に区別されるとは言えない。word とは何かという問題は自明の事柄のようだけれども、その定義となると極めて困難だと言わざるを得ない。しかし「本」を指して This is a book. / A book. と言ひ、時にはそれに対して Book? と 訊き返すこともあるから、'book' が分離されることが分ると同時に、'a' も分離されるわけである。また Is this a book? と言へるところを見ると this と is とが分離されることが分る。形式的に分離された this, is, a という words は勿論それぞれ意味を持つてゐるのである。意味のない word というものは考えられない。is, a 等に意味があるのは book 等に意味があるのと選ぶところはない道理である。to go, to see のような infinitive は二語より成つていて不可分であるけれども、to が word であることを否定することは出来ないし、to にも意味があることを認めないわけには行かない。It is half past ten. は五語より成つてゐるが、half past の代りに half-past と書くこともあるから、half-past ならば四語だと言わなければならない。word を決定するものは意味と形式の両方であると言うべきである。

Look at the rain! は Look! と 切ることが出来る。Gardiner の考えかたによれば (1) Look at the rain! / (2) Look! / (3) Rain! はすべて sentence であると言う。(1)は四語、(2)と(3)はそれぞれ一語より成るものである。しかし Gardiner は speech の単位は sentence であると言うのであるから、(1)も(2),(3)もすべて sentence であつて、それ以上の区別は出来ないことになる。word は language の unit で、sentence は speech の unit であるとする限り、word と sentence とは別個の sphere に属してゐて、一をもつて他の構造の説明に利用することは原理的に不可能であると言うより他はない。尤も Gardiner は locutional sentence-form なるものを設けて、subject+predicate の form を有するものを sentence の一種と認めているが、これが従来の文典で説くところの sentence である。しか

て他と区別するものであるから、その枠を固定することが出来れば speech を捉えることが出来ることになる。‘Rain!’ と書く（印刷する）という事は speech を捉える事であり、situation を固定する事にもなる。捉えられる speech は捉えられない parole と区別しなければならない。¹

‘Rain!’ という speech には language が用いられていて、speech の背後には language がひそんでいると Gardiner は言う。speech は parole のように「唯一つのもの」であるが、language は langue のように「共通のもの」である。speech は「同一」(identical) のものであるが、language は「同等」(similar) のものである。rain と言えばどれにも通じる language であるが、James Hawkins が ‘Rain!’ と言えば language の rain が speech となり、speech の中に language が使われたことになる。rain が ‘Rain!’ となるのは一般的な rain が特殊の rain に変ることであり、そのためには situation の設定が要請される。動かない操り人形が舞台に出されると活動しはじめるように、動かない language に situation という活を入れると speech となるのである。動かない language は初めから捉えられるものであるが、動く speech は situation の固定によつて捉えられるものとなる。捉えられる点では speech と language とは同じである。

Saussure の langue は language から parole を引いたものである。Gardiner の language はそれほど割り切った公式が立てられていない。従つて langue と language との比較も容易ではない。「language の最も重要な constituents は words であるが、syntactic rules や specific types of intonation も constituents である」² (p. 88) と言つたり、‘any system of signs is a kind of language’ (p. 67) と言つたり、‘the science which we call language’ (p. 62) と言つたりしているが、speech と比べて language は焦点がぼやけているようである。

Speech には situation があるが、language には situation がない。situation の有無が speech と language とを区別する。Gardiner の language は situation との関係を追究しさえすれば、ぼやけた焦点もはつきりして来て、speech と language の関係も理解しやすくなると思う。

3.

Gardiner によれば language の単位は word で、speech の単位は sentence

¹parole を捉えることも全く不可能ではないであろう。録音によつて phonation を固定することが出来るから。しかしその場合でもこれを聞く方の側からは parole としてでなく langue として受取ることになるのである。

²前に引用したように ‘Retrospect 1951’ では words, declensions, conjugations, syntactical rules が language だとも言っている。

るから、読者は初めから parole としてでなく langue として読むのである。

Gardiner の *The Theory of Speech and Language* からは次のような事項が引き出される。

- (1) speech と language とは相互に依存する。
- (2) language は speech の所産である。
- (3) language はすべての speech の母である。
- (4) language と speech の dualism を承認する。
- (5) language と speech とは別物である。
- (6) language は science であつて、speech は activity である。

この(6)の考えかたについて Gardiner は 'Retrospect 1951' の中でそれが必ずしも妥当ではないことを認めて、このような抽象的な説明の代りに具体的な比喩を提出している。

「The Latin language は辞典に載せられたすべての words と文典にあるすべての declensions, conjugations, syntactical rules とより成ると言えよう。それから speech の具体的な例は *Aeneid* でよからう。即ち speech の別名は 'text' に他ならない。雨の日に James Hawkins が 'Rain!' と言つた時、これを活字に印刷することが出来るのは、words が辞典や文典で印刷されるのと同断である。そこでここに language と speech とが共通の立場から具体的に明瞭に眺められて、両者の差がはつきりと認識されるであろう。language は lexicographer や grammarian の領域に属し、speech は text の editor や commentator の領域に属するものである。」

これで見ると James Hawkins が窓外の雨を見て 'Rain!' と言つたのを speech と考えると同時に、印刷された 'Rain!' もやはり speech と考えて、辞書や文典に印刷された rain を language として区別しようと言うのである。James Hawkins が 'Rain!' と言つた時既に parole としての 'Rain!' は消えているのであるが、speech としての 'Rain!' は活字に印刷することが出来ると言うのだから消えないで残るわけである。ここに parole と speech の相違点がある。

Gardiner は speech についてこう言っている。'An act of speech, as conceived of in this book, is no mere set of words capable of being repeated on a number of separate occasions, but a particular, transient occurrence involving definite individuals and tied down to a special time and place.' (p. 71) 故に Gardiner の speech は Saussure の parole のように瞬時的なものである点は共通している。即ち parole も speech も「唯一つのもの」なのである。James Hawkins の言つた 'Rain!' はこれが唯一つの parole であり speech である。だが parole が唯一のものであるのは phonation から見ての事であるのに、speech が唯一であるのは time, place 等の 'situation' から見ての事である。phonation は捉えがたいが、situation も捉えがたい筈である。しかし situation なるものは「speech の場」であつて、劇場の舞台のように言わば一つの枠を設け

- (6) langue と parole とは相互依存する。
- (7) langue と parole とは全く異なるものである。
- (8) langue と parole とを同一観点に結び合わせることは愚かなことである。
- (9) langue は体系である。

Saussure の parole は発声 (phonation) を含む個人的な行為であつて、人の話すものはことごとく parole であり、その総和も parole である。例えば A が B に向かつて (1) Good morning! と言つたら、それは parole であるし、B が A に向かつて (2) Good morning! と言つたら、それも parole であつて、(1) と (2) とは発声が異なるから別々の parole であるが、(1) と (2) の総和も parole である。このような (1) と (2) に対して、A の発声でも B の発声でもなくて、両者に共通する (3) の Good morning! という一つの langue の存在が考えられる。発声は parole に関係するものであつて langue とは無縁である。

A は犬を飼つていて、B も犬を飼つているとして、これを langue と parole の比喩に用いてみると、

- (1) (A の) 犬……Good morning! (parole)
- (2) (B の) 犬……Good morning! (parole)
- (3) 犬……Good morning! (langue)

(1) の犬と (2) の犬とは別物であるが、現実の犬である点では同じである。(3) の犬は現実の犬ではないが (1) と (2) に共通する犬であると言うことが出来る。(1) と (2) が目で見ることが出来るのは発声を耳で聞くことが出来るのと似ている。(3) は目で見ることが出来ない。(1) と (2) との総和は複数の犬であるが、(3) の犬は総和でなくて (1) と (2) に共通の犬である。

犬の比喩を Good morning! に戻して考えると、A の Good morning! と B の Good morning! とでは近似してはいても全く同じ発声である筈がない。parole は時の流れに似て常に動いて止まることがなく、瞬時的であつて捉えることの出来ないものである。ところが A と B に共通するものを抽出した Good morning! という langue は parole のように瞬時的なものではなくて、幾何学的な点や線を紙上に描いて示すことが出来るように、捉えることが出来るものである。¹

このように見て来ると Saussure の parole と langue は全く別のものであつて、一つのものを別の面から見たものではないことが分る。舞台の上で役者の話すものはすべて parole であつて、観客はそれをそのまま聞くのであるが、parole としてでなく langue として受取るのは、犬を見て犬だと受取るのと似ている。しかし書かれた戯曲の中で話されるものは既に作者の手を経て langue 化したものであ

¹ parole と langue を犬に比喩したのは本当は適切ではない。現実の犬は目に見えるし、捉えることが出来るものであるが、非現実の犬は目に見えないし、捉えることも出来ない。が parole は捉えられないのに、langue は捉えられる。ただ現実、非現実の点で犬の比喩と一致するに過ぎない。

Speech and Language 論

空 西 哲 郎

1.

Saussure は parole 対 langue の理論を樹立した。Palmer はこれを speech 対 code として考え、Gardiner は speech 対 language として考えた。parole に speech を当てたのは一致したが、langue に当るものが code と language とで食い違つた。Saussure の *Cours de linguistique générale* (1931³) の中に 'le code de la langue' (p. 31) などとあるから Palmer もこれを用いたのかも知れない。Gardiner も *The Theory of Speech and Language* (1951²) の中で、language は 'a codified science' (p. 21) である、などと言っているので、code と langue と language とが互に縁のないものではない事が分る。しかし parole : langue = speech : code = speech : language であるとは言えないようである。Saussure, Palmer, Gardiner はそれぞれの立場から問題を取り上げていて、仔細に見れば、かなり違つたものである事が知られる。特に Gardiner の理論はわが国の英学界に大きな影響を与えていると考えられるが、前記の著書の再版に 'Retrospect 1951' が加えられたのを読んで、この際彼の speech 対 language の理論を検討して、果たして彼の言うように general linguistic theory を打ち立てて grammar の再建が出来たかどうかを考えてみたい。そのためには Saussure の理論との比較から始めなければならない。

2.

Gardiner は 'Retrospect 1951' の初めに 'It would be over-sanguine to suppose that the distinction of speech and language first proposed by De Saussure and further developed by myself had by now obtained general acceptance and was beginning to bear fruit.' と書いて、Saussure が最初に langue と parole の説を言いだして、Gardiner がその説を展開したのだと言明した。

Saussure の *Cours de linguistique générale* からは次のような事項が引き出される。

- (1) langage = langue + parole
- (2) langue = langage - parole
- (3) parole には langue が必要である。
- (4) langue には parole が必要である。
- (5) parole は langue に先行する。